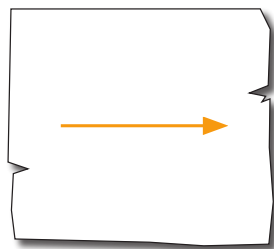


7 THE 7 FRAMES FOR LIFE 7つのワクワク枠 となりのコンパス③

第3フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

ライフは、
この上ない宝じゃ。

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



となりのコンパス③

『 → 』

プロローグ

49

ランプベリーは、いつしか^{ひるね}昼寝を始めていた。

「——で、おじいちゃんの^{しょうらい}将来は？」 僕は、^{ぼく}軽い^{かる}気持ちで^{たず}尋ねた。

「——。 ——わしゃあ、^し死ぬだけじゃな」

「——」 ……

しばし^{ちんもく}沈黙が^{なが}流れた——

かと思うと、おじいさんは^{ふた}再び^{くち}口を開いた。

「——というのは、^{じょうだん}冗談じゃ。

こう見えてもな、わしにも、^{しょうらい}たーんと^{ゆめ}将来の^{もくひょう}夢や^め目標がある。

^{ないよう}内容は、^{ひみつ}秘密じゃがの」 おじいさんは、^{こころ}ゆったり心笑んだ。

「——」

「それに、わしには、^{おも}すてきな^で思い出たちもある。

それに、わしには、^{しあわ}幸せな^{いま}今もある——」 ^{まんぞく}満足^えそうな^う笑みを^う浮

かべているおじいさん。「みんな^{だいす}大好きじゃ。みんな——」 おじい

さんは、そのまま、^{すわ}座った^{しせい}姿勢^めで^と目を閉じた。

「スー —— スー —— スー —— …」 かすかに^{ねいき}寢息をたてているおじいさん——。僕は、おじいさんが^{しぜん}自然に^め目を^さ覚ますまで、^{すいへいせん}ぼんやりと^{かなた}水平線の^{なが}彼方を眺めていることにした。

50

「——あ？ すまん、すまん。思わず、^{おも}夢の中に^{ゆめ}入り込んで^なしましうたわい。やっぱり、もう^{とし}年^じじゃのう。アッハッハッ！」

「——。 おじいちゃんの^{じんせい}人生—— これからも、^{なが}長いんだかんね？ これからも、ずっと—— ずっと——」

「——」 おじいさんは、^{なに}何も^い言わずに^{ふた}再び^め目を閉じた——
かと思うと、^{くち}口を開いた。「——サンキュー」

^{ひこうきぐも}飛行機雲の^{おおぞら}ラインが、^{えが}大空高く^{ようす}描かれて^みいる様子が見える——。

「^{おも}思ったんだけどさあ、7つの^{わく}フレーム・^{けつぎ}フォー・^{なん}オール・^らライフ——7つの^{わく}ワクワク^{けつぎ}枠って、^{なん}結局は何のためになるの？

——ゴールは、^{なに}いったい何？」 ^{そつよく}率直に^{たず}尋ねてみた。

「——。 ——ん？ ^{まえ}前に^{はな}話さなかったっけ？」とおじいさん。

「え？ ——^き聞いたっけ？」

「——まあ、いづれにせよ、そいつは、いや、そいつも——
おまえさんに^{まか}任せるのが^{いちばん}一番よいじゃろう」

「——。 ——どうして？」

「——。 はて、どうしてかな——」

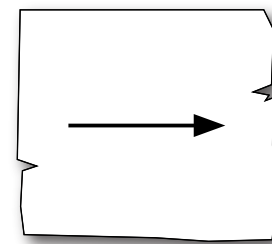
「——」 . . .

「——うむ。では、そろそろ、^{だい}第3フレームについて^{せつめい}説明しようかの」

「ああ、^きほい来た」 ^{ぼく}僕は、^{おじいさん}おじいさんに^{ちず}地図を^{てわた}手渡した。

音楽——テーマ曲イン
♪ハーモニー Harmony
タイトル流れて。
——音楽フェード・アウト

第3フレーム



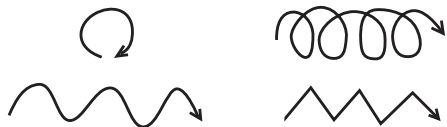
51

「よーく見ておれよ。こうじゃ」 おじいさんは、まず、紙の上で
指を滑らせながら、左から右へとゆっくり移動させた。あたかも、
そのスピードにも意味があるかのように——。

すると、次に、その末端にVの字を90度回転
させたものを付け加えた。思わず、空の飛行機雲をちらりと見た。

「へ？ 何だこりゃ？ これでおしまい？」

「そうじゃのお。ほかに——」 今度は、ぐるりと円を描いたり、
クルクルらせんを描いたり、波打つように描いたり、ジグザクに
描いたりして、それぞれの末端に“回転V”を付け加えた。



前に夢の中で見た空飛ぶコンパスの“メチャメチャな動き”を、
ふと思い出した。「おじいちゃん——、——なめでない」

「なめておらん。大まじめじゃ。まあ、最初のまっすぐのやつは、
ほんの一例にすぎないということじゃな」

「それにしても、——いったい何だこりゃ？」

「第3のワクワク枠、第3の“フレーム・フォー・オール・ライフ”
じゃ。少なくとも、いろーんな“ライフのあり方”があることを教
えてくれる」

「こんなの—— わかりっこないよ」

「そうか？ ——それでは、わしゃあ、これから昼寝タイムじゃ」

「あ？ さっき眠っていたじゃん」

「アッハッハッ！ 昼寝イコール睡眠だとは限らんじゃろ？」

「は？」

「さて、これから気合い入れて横になって昼寝しようかの」 おじ
いさんは、そのまま本当に横になった。「——昼寝タイム、スター
ト。カーン♪」

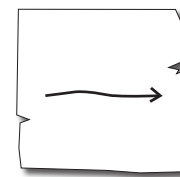
「どうしてゴングが鳴るんだよ。それに、そもそも、なぜ昼寝なん
て——。——時間ももったいないよ」

「まあ、生きているから—— そう答えておこうかの」

そのとき、この第3フレームのすごさを、全く想像できなかった。

52

家に帰ると、さっそく鉛筆で書き入れてみた。



ちょっと曲っちまったけど—— ま、いっかあ。

おじいちゃん、あれこれゴチャゴチャと描いていたしなあ。

「おーい、わかる？」 手に持つと、さっそくコンパスに話しか
けてみた。

「はいほーい♪ わかるのでございますう〜♪」 いつものあの声。

「よっ、久しぶり。——それにしても、第3フレームってさあ、
全く、ふざけているよね？」

「なぜ、そのように思うのでございましょう～？♪」

「なぜって、そうじゃん。メチャクチャ何でもありのようだし——
全く意味不明だし——誰がどう見たって、そう思うはずだよ」

「なるほどお～♪ そのような理由がございましたので、若干の、
ご立腹モードなのですねえ～♪」

「——あれ？ やっぱり、どことなくキャラクターが変わっている
気がする——」

「ギャハハ！ きっと、アップグレードしたからなのでございます
よお～♪」

53

第3フレームを利用したプチ・マップ作りは、一筋縄では行かなか
った。

その後も、そのことを何度も考えてみたものの、さっぱり意味が
わからないまま、ときが過ぎるだけだった。

そして、夏が終わりを告げ——秋が深まりつつあった、ある晴
れの日の朝——ランプベリーが息を引き取ったんだ。

音楽イン ♪秋 Autumn

——ショックだった。泣いた。へこんだ。

それでも、日中に一家で一通りのことを済ませた。

その日の夕方——僕は、ベッドの上に横になり、天井を眺めな
がらランプベリーのことを振り返った。

ランプベリーは、祖母の家で生まれて間もない子犬の頃に、おじ
さんの車で運ばれて初めて家にやって来たんだっけ——。

初めて家にやって来たとき、ダンポール箱の中で“クンクン、ク
ンクン…”と弱々しく鳴いていたランプベリー。

おそろおそろ初めて抱っこした僕の顔を、ペロペロしていたラン
プベリー。

投げたボールを、しっぽを振りながら追いかけたランプベリー。

初めて外の犬小屋で夜を明かす晩に、遅くまで付き添っていたと
きの不安げなランプベリー。

毎日のように海辺や川辺へと一緒に散歩していたランプベリー。

子犬を3匹産んだランプベリー。

おじさんにじゃれつき、顔をペロペロなめていたランプベリー。

穴を掘り続けている僕を、のぞきこんでいたランプベリー。

イチゴを器用に食べていたランプベリー。

砂浜を駆けまわっていたランプベリー。

仰向けになり、じっと気持ち良さそうにしていたランプベリー。

励ますかのように、そばに寄り添ってくれていたランプベリー。

…

「大丈夫でございましょうか？ よろしければ、代りに、わたくし
をランプベリーとお呼びになるのでございますう～♪」心配して
くれたコンパスが、そのように声をかけて励ましてくれたことも
あった。でも——、——それでも、ダメだった。

それから何日か経過したある日——

いつもの散歩コースにある橋の端に座り、そこから、山の端に沈もうとする太陽が生み出す“川面のキラキラ”を、ぼんやりと一人で眺めていた。

この光景を、何度、ランプベリーと一緒に眺めただろう？

——なんで、死にしまったんだよ？ ランプベリー。

・・・

どれくらいの時間が経ったのだろう。

ある考えに、ようやく、たどり着いたんだ。

——わかったよ。ランプベリー。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ゆっくり立ち上がった僕は、家へ向けて、思い出いっぱい散歩道をしっかり歩き始めた。

54

音楽イン ♪美しき自然 Beautiful Nature

「おーい、わかったよ！ 第3フレームの意味！」

「ほい〜？ ♪ 何でございましょうか〜？ ♪」

「うん。“流れ”を意味しているんだよ！」

「ほいほいー ♪」

「例えば——

太陽がしずむ流れ—— つまりは、地球が1日に1回、自転すること。（『朝→昼→夕→夜→…』）



季節がめぐる流れ—— つまりは、地球が1年に1回、太陽の周りを公転すること。（『春→夏→秋→冬→…』）



雲が雨となり、川として海へ注ぎ、再び、雲となって空に浮かぶ流れ。（『雲→雨→川→海→雲→…』）

葉っぱの中で、水と二酸化炭素と光から、炭水化物と酸素が作られる流れ。（『水+二酸化炭素+光→炭水化物+酸素』）

種子から芽が出て葉や茎が育ち、花が咲き、実を結び、再び、種子ができる流れ。（『種子→芽→葉っぱ&茎→花→果実→種子→…』）


食べものが生産され、運ばれ、お店に並び、買われて、食卓に並ぶ流れ。（『食料品の生産→物流→お店→購入→食卓』）

水や電気、ガス…が、各家庭へ供給される流れ。（『供給者<供給装置>…→水道管、電線、ガス管 (or ガスボンベ) …→家庭』）

工場で製品が作られ、運ばれ、お店に並び、買われて、家庭で使われる流れ。（『製品の生産→物流→お店→購入→家庭』）

リサイクル or リユースする流れ。（『使わなくなったもの→回収→再利用→…』）

いえ すなはま すなはま いえ かえ なが
家から砂浜へでかけ、砂浜からまた家に帰ってくる流れ。
(『家 → 砂浜 → 家』)

ペダルをこいで、クルクルとタイヤを回す流れ—— 
つまり、自転車に乗ること。(『キ → コ → キ → コ → キ → コ → …』)

いっ ぽ いっ ぽ なが
一步一步の流れ—— つまり、歩くこと。
(『右足 → 左足 → 右足 → 左足 → …』)
(『テ → ク → テ → ク → テ → ク → …』)

しんぞう なが
心臓のドキドキの流れ—— つまり、血液が体内を循環すること。
(『ド → キ → ド → キ → ド → キ → …』)
(『心臓 → 動脈 → 脳、肺、胃腸… → 静脈 → 心臓 → …』)

いき す は なが
息を吸ったり吐いたりの流れ—— つまり、呼吸すること。
(『スー → ハー → スー → ハー → …』)

なか す た なが
お腹が空いたり食べたりの流れ。
(『お腹が空く → 食べる → お腹が空く → 食べる → …』)

ねむ め ぎ なが
眠ったり目覚めたりの流れ。
(『眠る → 目覚める → 眠る → 目覚める → …』)

いのちある存在が生まれ、育ち、年月を重ね—— いくつか生命力
をなくし—— 土や空気、海や川といった自然の中へ還る流れ。
(『いのちが生まれる → 育つ → 年月を重ねる → … → 生命力をなくす
→ 自然の中へ還る。 → …』)

お こ た なお げんき なが
落ち込みから立ち直り、元気になる流れ。
(『落ち込み → 元気』)

ある人生からある人生へ“ライフのあり方”を変える流れ。
(『ある人生 → ある人生』)

コンパースがアップグレードする流れ。
(『カタチ コトバ カラダ アタマ』
→ 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』
→ 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』 + 『→』)

ひと あか たんじょう おや いだ せいちょう ほんたつ
人が赤ちゃんとして誕生し、親に抱かれ—— 成長 & 発達し、
はな さ み むす
花が咲き、実を結び—— … いつか赤ちゃんを誕生させ、親として
あか いだ く くり なが
赤ちゃんを抱き… を繰り返す流れ。
(『誕生する → 成長 & 発達する → 花が咲く → 実を結ぶ → …
→ 赤ちゃんを誕生させる → 親として赤ちゃんを抱く → …』)

おも えが みらい すじが なが
思い描く未来のシナリオ(筋書き)の流れ。
(『高校に行く → フルーツのような何かを、自分らしくどうやって生み
出すかを見つける → 努力を積み重ねる → 実現する → …』)

…
どれもこれもが、この第3フレームの枠で説明できるんだよ！」
「ほういほういほういー！♪」

「そう言えば、ずっと前に、おじいちゃん、“ライフが変わることは、
生きている証だ”と話していた。それに、呼吸のスーハースーハー
や心臓のドキドキなんかも、まさに生きている証だと言えそうだし。
——そうだよ！ 第3フレームは、人生はもちろん、生きている

こと、いのち、^{せいめい}生命、^{せいかつ}生活、^{らいふ}ライフライン、^{らいふ}ライフサイクル、^{せいじょう}成長
 や^{せいじゅく}成熟、^{アップグレード}アップグレード…を^{含む}含む、あらゆる^{いのち}ライフの^{せつめい}営みを説明
 してくれる、ものすごく^{こんぽんてき}根本的なフレームなんだよ！ だから、フ
 レーム・フォー“オール・ライフ”なんだよ。きっと——。僕は、^{おも}そう思うよ！」

「——お^{げんき}元気になるれて、よかったですう〜♪ ウルルル… ウル、
 ウル…」

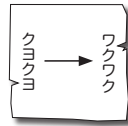
「ありがとう。^{しんぱい}心配かけて、ごめんよ」

「ウル、ウル… ヒック」

「——。 ^き決めたんだ——。

ランプベリーのおかげで^{たの}楽しかった^{ひび}日々の^{おも}思い出を^で心に^{こころ}しっかりと
^{きざ}と刻みながら、^{まえ}前を^む向いて^い生きるんだ！

ずっとクヨクヨしながら^{くら}暗く^い生きるのではなく、できるだけ^{わく}ワク
 ワクしながら^{あか}明るく^い生きるんだ！



^{こころ}心の中の^{なか}ランプベリーとともに——」

「ヒック、ヒック、ウル、ウル… ヒック」

「しかも、それは、きっと—— ^{かな}悲しみを^の乗り越えながら、^{あか}明るく
^い生きているおじいさんが、^み身をもって^{おし}教えて^くれていることでもあ
 るはずだ——」

「ヒック、ヒック、ヒック…」

音楽 ♪美しき自然 Beautiful Nature 55 へ続く

55

それから、^{だい}第3フレームを^{りよう}利用した^{あたら}新しい^{つく}プチ・マップの作り
^{かた}方が、^{つぎつぎ}次々と^み見つかった。

『^{さき}先 → ^{あと}後』

『^き起 → ^{しょう}承 → ^{てん}転 → ^{けつ}結』

『^{せつぞくし}接続詞 (そして、だから、なので、おかげで、しかし、でも、ところが…)』

= 『 → 』

『スタート → プロセス → ゴール』



『^{こんきょ}根拠 → ^{けつろん}結論』

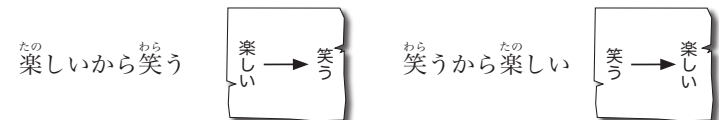
『^{げんいん}原因 → ^{けつ}結果』

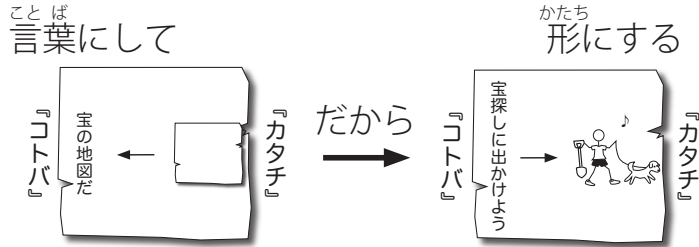
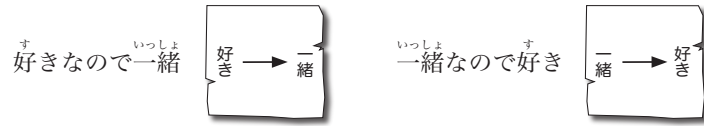
ランプベリーがいたおかげで、^{たの}楽しかった。

(『ランプベリーがいた → ^{たの}楽しかった』)

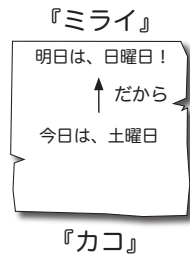
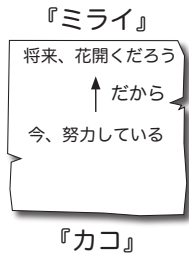
生きている—— だから、^{ひるね}昼寝する。

(『生きている → ^{ひるね}昼寝する』)

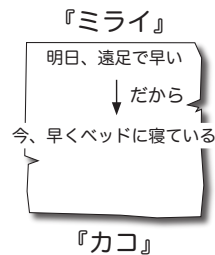
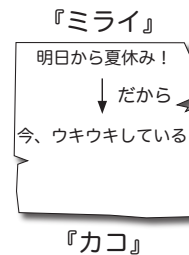




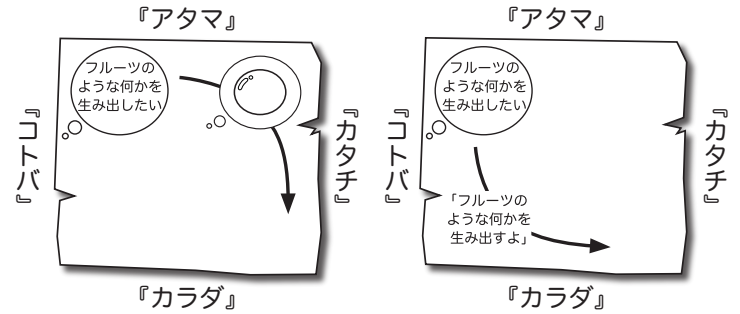
『イマ』 → 『ミライ』がある一方で——



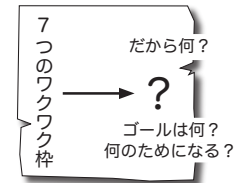
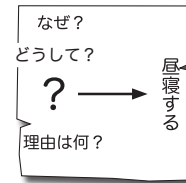
『ミライ』 → 『イマ』もある。



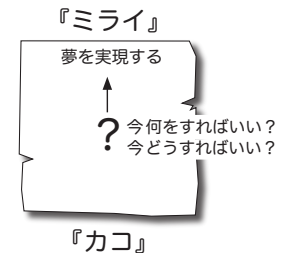
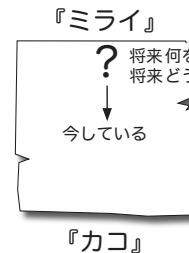
頭の中で形にしてからの不言実行がある一方で、頭の中で形にし
しないままの有言実行もある。



『なぜ？』『どうして？』『理由は何？』がある一方で——
『だから何？』『ゴールは何？』『何のためになる？』もある。



『将来何をするため？』『将来どうするため？』がある一方で——
『今何をすればいい？』『今どうすればいい？』もある。



56

コンパスとの別れは、予想通り、雪解けの季節に訪れた。

それは、中学卒業を間近に控えた頃でもあった。

音楽イン ♪春 Spring

「オーナー様へのお仕えは、これで引退なのでございますう〜♪

これからは、結婚して幸せな家庭を築くという夢を実現するため、努力して参ろうと思っっているのでございますう〜♪

——そうなのでございますう〜♪ 引退は、ゴールであると同時にスタートなのでございますう〜♪ ギャハハ！」

「うん。応援しているよ」

「ありがとうございますなのでござう〜♪」

「——うん。ところで君は、このあと、どこに行くことになるんだい？」

「——。きっと、どこにも行かないのでございますよお〜♪」

「——え？」

「いつも、近くにいるのでございますう〜♪」

「え？ 近くって——、——どこ？」

——ここにいるのでございますう〜♪

「——。コノヤロ、コノヤロ、コノヤロ！ 映画みたいなことを言いやがって！」

「ギャハハハ！」 「アハハハッ！」

ぼくらは、一緒に笑った。

「——うん。おかげで、これまで楽しかったよ。いろいろ、どうも

ありがとう」

「こちらこそ、おかげ様でしたのでございますう〜♪

ありがとうございますでしたですう〜♪

——それでは、そろそろお別れのお時間なのでございますう〜♪

お元気でいらっしゃるのでございますう〜♪ さようならなのでございますう〜♪」

「さようなら。君もお元気で」

あいさつが済んでから間もなく、コンパスの表面の『→』とコンパスの針の絵が、ジワジワと消えた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

57

中学を卒業した僕は、その春、そのまま地元の高校に進学した。

そうして、高校生として最初に迎えた初夏——

音楽イン ♪夏 Summer

晴れの日に一人で岬へ向かった。

いつもの下り勾配にたどり着くと、いつもの場所にキラリを見つけた。

「お、いるいる！ ——アハッ！ 相棒とは、よく言ったもんだよ。——おーい、おじいちゃーん！ やって来たぞお〜！」

しかし、キラリに近づくにつれ、足の動きが鈍った。

音楽 突然停止 ♪夏 Summer

まるい石の近くに存在していたのは、おじいさんではなく、ビンだ
けだったんだ。

ビンの中には、紙が折りたんで入っていた。

——地図？

呆然としながらも、中身を取り出して広げてみた。

すると、それは手紙だった。

音楽イン ♪冬 Winter 手紙& 58へ続く

わかもの
若者へ

わしは、もうダメじゃ。

生きている間に

おまえさんに

どうしても伝えておきたいことがあるから
手紙を書かせておくれ。

ライフは、
この上ない宝じゃ。
至宝じゃ。

生きてること——

それは、とつても、ありがたいことじゃ。

とつても、うれしいことじゃ。

とつても、すごいことじゃ。

どんなに、ささいに^{おも}思えることも
^{かぞ}数えきれないほどのミラクルの^{うえ}上に
 成り立^たっておることじゃ。

^{こきゅう}呼吸できること
^{わら}笑えること ^な泣けること
^{かつどう}活動できること ^{やす}休めること
^{おも}思い出せること ^{みらい}未来を^{ゆめみ}夢見られること
^{はな}話せること ^き聞けること
^{あい}愛せること ^{あい}愛してもらえること
 …

これらは、^{ぜんぜん}全然あたりまえのことじゃない。

そりゃあ、ときには、
^{しっばい}失敗したり、^{きず}傷ついたり、^{こうかい}後悔したり
 せつなかつたり、^{くる}苦しかつたり…
 もあるかもしれん。

じゃがな、これらすべてをひっくるめても、
^{だんげん}断言できる。

ライフは
^{うえ}この^{たから}上ない宝じゃ。

^{しほう}至宝じゃ。

ライフそのものが
^{たからもの}宝物なんじゃ。

プレゼントされたいのちを大事にだきしめながら、自分らしく、幸せに生きるんじゃぞ。
それが何よりの親孝行でもある。

大きくなったおまえさんと再会できて、
とっても、とっても、うれしかったよ。
これまで、毎年来て相手してくれて、
どうもありがとう。

それじゃあ、達者でな。

岬のおじいさんより

お父さん、お母さんにも、よろしく。

この丸い石は、わしらの形見だと思って、
お守りだと思って、かわいがってやってくれ。

新たなフレーム・マスターの居場所は、
その地図が教えてくれるはずじゃ。

58

そりゃないぜ、おじいちゃん——・・・

涙があふれて—— あふれて——

おじいちゃんの、あの満足そうな笑みも、あの立てた親指を前後
させるしぐさも、あの大笑いも… どれもこれもひっくりめて——
おじいちゃんのライフそのものが、この上ない宝だったんだ。
・・・

涙でぼやけている海や水平線——。

ランベリーもいなくなっちゃったし、コンパスもいなくなっ
ちまった。そして、おじいちゃんまでいなくなっちゃった。

全身の力が抜けた僕は、ガックリと、ひざまずいた。

そのとき——

あっ！

力の抜けた指先から、風に乗って地図が舞いあがった。

かと思うと、そのまま風に乗って、海の方へと向かった。

地図を見失うまいと海岸を少し下って断崖絶壁の地点まで来る
と、そのまま身を乗り出して、地図の行方を追った。

地図が、ひらひら海面まで舞い降るのが見えた。

涙でぼやけている地図は、プカプカと波に揺られ、少しずつ遠
ざかっている気がした。

音楽 ♪冬 Winter 59 へ続く

59

みんな、いつか、いなくなるということ——

だれもが——

いつか生まれ、いつか死ぬということ——

手元の丸い石と手紙をぼんやり眺めながら、しばらく思いめぐら

せた。——とそのとき、ハッとしたんだ。

少なくとも遺された形や言葉は、生き続けるんじゃないか？

そうだ！ この石とこの手紙が、そのことをはっきり教えてくれ

ているんだ！

遺された形や言葉は、石や手紙だけじゃない。おじいちゃんの風
貌やふるまい、笑い声や話し声…を含む、心の中に遺された形や言
葉もある。これらは、心の中で生き続ける。

それに、おじいちゃんが遺した形や言葉が生き続ける一方で——

明るさ、ユーモア、優しさ、愛情…を含む、おじいちゃんの心も、
僕の心の中で生き続ける。

つまり、おじいちゃんと出会ったおかげで育まれた僕自身の心も、
生き続ける。

——そうだ！ 決して、生まれる前の、もとの状態に戻るわけじゃ
ないんだ！

何かが遺り、何かが生き続けるんだ。

誰もが何かを遺し、誰もが、何らかの形や言葉で生き続けるんだ。

きつと—— ずっと——

・・・

音楽 ♪冬 Winter 60 へ続く

60

それから、なぜか——

3匹の子犬たちを産んだランプベリ—

僕らを出産してくれた母

何年も幼虫として地中で暮らし、

ある夏に羽化して成虫として次世代を生むセミたち

多くの種を実らせるヒマワリ…

のことが、次から次へと頭に浮かんだ。

そうだ。

生きものたちは、決して、ただ生まれて死ぬだけじゃない。

生きている間に、精一杯“ライフのリレー”を達成しようとして

いるんじゃないか？

この“ライフのリレー”は、この地球上の生命の誕生のときから
ずっと何十億年も続いているはずだ。

だから、今生きている生きものたちは、本来、全力で“ライフの
リレー”を達成しようとしている真っ最中であるはずだ。

確かに、おじいちゃんのように、実の子孫を誕生させるという形
では“ライフのリレー”を達成できない場合もあるだろう。

しかし、その場合も、別の形で、別の意味で“ライフのリレー”
を達成できるんじゃないか？ それこそ、おじいちゃんが、はっきり
証明してくれているように——。

それに、どんな場合であっても、何らかの形や言葉で、ほかの誰
かの“ライフのリレー”を助けることは可能だろう。

・・・

将来、実の子孫を誕生させられようが誕生させられまいが、どちらにしても関係ない。僕も、この“ライフのリレー”を何らかの形や言葉で全力で果たしたい。応援したい。それは、おじいちゃんを生かすことにもなるはずだ。・・・

おじいちゃん—— オレ——

フレーム・マスターになりたい。

——なるよ。

そして、おじいちゃんが遺してくれた形や言葉、心……つまり、おじいちゃんの“ライフ”を生かし続けるんだ。

音楽 ♪冬 Winter 61 へ続く

61

重大なことに気づいたのは、そのあとだった。

あの地図がなければ、新しいフレーム・マスターに出会えない。出会えなければ、残りのフレームが何なのかわからない。

わからなければ、フレーム・マスターになれない。

!!!

急いで海をのぞき込んだ。

どこだ!? …… ——あっ、あった! まだ見える!

いくらか離れた海面上に、地図が浮かんでいた。

海に入って取り戻す?

——いや、でも、ちとコワくないか?

もし、おぼれたりしたら——

——いや、でも、学校のプールで50メートルは余裕で泳げるし、おぼれたりはしないだろう。

うん、大丈夫さ。今しかタイミングがなさそうだし——

いや、でも——

・・・

迷ったあげく——、——決めた。

——サブン!

僕は、海の中に飛び込んだ。

音楽 ♪冬 Winter 62 へ続く

62

けれど——

そのときの海は、甘くなかった。

泳いでも泳いでも地図に近づけないばかりか——

「あぐっ」海面の上に顔を出しているのがやっとで——

「うげっ、うごっ」——まずい! おぼれちまう!?

思いとは裏腹に、地図との距離がますます広がる一方——

「おぐっ、おごっ」——引き返す? でも、地図が必要だ。

「おごげっ」——地図が沈んだ!?

とうとう地図を見失った。

音楽 ♪冬 Winter 63 へ続く

63

どれくらいの時間が経ったのだろう？

岸へ戻ることが難しくなっていることに気づいた。

もがけど、もがけど岸に近づけないばかりか、まともに浮いてい
ることさえもできなくなっていて——

それでも——懸命に、もがいた。

「ごぼっ」

・・・ ——う、うそだろ？

「うごっ」

・・・ ——こ、こんなことがあっていいのか？

「おごっ」

・・・ やってみたいことが、いっぱいあったのに——

「かぼっ」

・・・ あれとか—— これとか——

少しずつ体がついてこなくなっていた。

「あがっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ伝えなきや——

「ごぼぼっ」

・・・ あれとか—— それとか——

「おごごっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ—— ごめんよ——

体が、とうとう、ほとんどついてこなくなった。

「——」

・・・ ああ—— ああ—— ・・・

音楽フェードアウト ♪冬 Winter

「おまえ～！ 何やっとうる～！？」

そのとき、かすかに声が聞こえた。

まぼろし？

ギリギリのところで懸命に周りを見ると——信じられないこと
に、船に乗っているおじいさんが、そこにいた。

——え！？

「何やっとうる！？ おまえ！」 この耳で、はっきり聴けた。

おじいさんは、必死の形相で、腕をがっちりつかむと、渾身の力
で、僕を船上に引き上げてくれた。

岸辺へ向かう船上で、僕らは、お互いに無言だった。

それでも、おじいさんは、自分の家まで僕を連れてゆき、シャワ
ーと着替えを提供してくれた。

64

僕らは、水平線の見える、いつもの地点にたどり着いた。

そこでついに——おじいさんは、立った姿勢のまま、怒りを爆
発させた。

「ばかものお！！ ——わしが来ておらんかったら、本当
に、死んでおったぞ！！」

こんなに怒るおじいさんを初めて見た。

「だって——」・・・「——おじいちゃん、死んだんじゃ…」

「ふざけるな！！——何、寝ぼけたこと、言っておるんじゃ！？わしが死ぬと、おまえさんも、一緒に死ぬのか！？そのことが、おまえさんがとった行動のよりどころだったのか！？これが、わしの死から、おまえさんが導き出すことなのか！？」おじいさんの声は、震えていた。

「——」確かに、「おじいちゃんの死」を理由にするのは、間違えている——。

僕は、口を真一文字に結んだ。

おじいさんは、しばらく経ってから、静かに口を開いた。

「——むかし、巨大地震が起きて、とてつもなくでつかな津波が押し寄せてきた地域がある。

そのとき、多くの尊い命が、犠牲になってしまった。

音楽イン♪ Wishes In Sorrow

倒壊物に押しつぶされてしまった者、土砂に流されてしまった者もおった。波に飲まれてしまった者、沖に流されてしまった者もおった。

突然、人生を奪われて、夢を砕かれて—— どんなか、つらかったことか——。どんなに無念で、どんなに悔しかったことか——。

どんなに家族を心配し、どんなに残す者たちの身を案じたか——。

どんなか、二度とこのようなことが起きないように願ってくれたか——…」

「——」

ふと見ると、おじいさんは顔をしわくちやにしている—— 涙だか、汗だか、海水だか、とにかく顔がメチャクチャ濡れていた。

「彼ら彼女らが身をもって教えてくれた、かけがえのない知恵を大切に守り続けなければならない。

彼ら彼女らを心の中に生かし続けて、その生きていた証を、その愛を語り継がねばならない。

彼ら彼女らの分も、生きねばならん」

「——」確かに、そのとおりでよ。そう想いながら—— ありったけの涙がこぼれ落ちているように感じた。

「——おまえさんの人生、本当に、これからなんじゃぞ。わしよりずっと若い分、これから、楽しいことやうれしいことに、わしより、はるかにいっぱい出会えるはずじゃ。

それに—— いやなことだけでなく、いいこともある。それが人生じゃ。それは、自然が、脅威になるだけでなく、恵みにもなってくれることと同じじゃ。

じゃから、たとえ、今、どんなにつらいこと、いやなことがあったとしても—— 決して早まるんじゃないぞ。ふんばって生きておれば、きつと、いいこともあるはずじゃ。そのつらさが大きいほど、のちの小さな喜びでさえも、よりありがたく感じられるじゃろう。

——そういう意味でも、おまえさんの人生、これからなんじゃ」

親身になって僕のために思って、そう言ってくれているのだと痛いくらいわかった。とてもありがたかった。

——誤解の有無は、全く関係なかった。

音楽フェードアウト ♪ Wishes In Sorrow

65

僕たちは、その水平線の見える地点に並んで腰を下ろした。

「無事で何よりじゃった。うん、よかった。うん、よかった」 し
みじみと言うおじいさん。

「——。——おじいちゃん？」 意を決して問いかける僕。

「——ん？」

「——。手紙——」

「——ああ。——すまんかったのお」

「いったい、何があったの？」

「——骨じゃ」

音楽イン ♪冬 Winter

「骨？」

「ああ、魚の骨じゃ」

「——」

「あのやろう—— どでかくて、硬くて、するどくて—— そいつ
が、のどに引っ掛かっちゃって—— 痛くて、痛くて—— 血も出
るし、鼻水も出るし、涙も出るし、息もまともにできんし—— 苦
しいのなんのって、そりゃあ、もう、絶対死ぬと確信したんじゃ」

「——」

「それで—— それでも—— 生きている間に、おまえさんに、ど
うしても伝えなきゃならんことがあると思って—— 痛みこらえな
がら—— 涙流しながら、その手紙を書いたんじゃ」

「——」

「その書いた手紙をビンに入れて、石と一緒にいつもの昼寝の場所

に置くと—— その場で力尽きて、いよいよ最期だと覚悟しながら、
そのまま横になって目を閉じた」

「——」

音楽 一時中断 ♪冬 Winter

「そしたら—— そしたらよ、——夢を見たんじゃ」

「夢？」

「不思議な夢じゃった——」

その夢は、次のような内容だったらしい。

いつもの場所で横になっていると、“起きて、起きて”という感
じで、ほっぺに刺激が加わった。

それがランベリーのパロパロであることに気づいたおじいさん。
“こらすぐたい。やめる。ランベリー。こら”と心の中で話し
かけるけれど、声が出ない。目も開かない。起き上がれない。…

すると、遠くから声が聞こえてきた。「おーい！ 元気に生き～
ているかあ～い？♪」 それは、僕の声だった。

“おーう！ 元気に生き～とるともお～！♪”と心の中で返事する
けれど、声が出ない。目が開かない。起き上がれない。

…

「オイオイ♪ 奮発してメロンを持ってきたぞ～♪」と僕の声。

“メロン… メロン…” 「——メロン!!!」 おじいさんは、
そのとき、やっと夢の中で声を出せた—— と同時に夢の中で目を
開けられた。

「——ようやく実際に目を覚ましたのは、メロンを受け取ろうと
する、まさにその瞬間じゃった」

「——」 ——オレたちより、メロン!?

「そしたら—— その夢をきっかけにして、次から次へと楽しかった思い出たちが心に浮かんできよった。

それに、将来の楽しみも、次から次へと浮かんできよった」

「——」

「そしたら—— なんだか妙に元気が湧いてきてよ、もうちっと頑張ってみようかなって気になっちゃって——。

——あとは気力よ」

音楽 途中から再開 ♪冬 Winter

「気力？」

「そうじゃとも。もうろうとしながら、歩いて歩いて—— 気力で船を操作して、となり町の港まで行って—— それから、フラフラしながらも気力で歩いて歩いて—— そうしてやっと、港の近くにある病院にたどり着いたんじゃ」

「——」

「もし、お前さんたちがおらんかったら—— もし、お前さんたちが毎年ここに訪ねてくれておらんかったら—— わしゃあ、とつくに、完全にあきらめて—— 本当に死んでおった」

「——」

「お前さんたちは——、——わしの命の恩人じゃ」

「——っていうか、おじいちゃんこそ、僕の命の恩人じゃん」

「お互いに無事で何よりじゃった! うむ。うむ」 おじいさんは、泣いているのか笑っているのか、よくわからない表情をしていた。

「おじいちゃん——」 おじいさんの肩に頭をくっつけるようにしてかがみ、目を閉じた。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

66

「ライフは、この上ない宝——」 僕は、そうつぶやいた。

「そうじゃとも」

「——あ、そうだ! わかった!」 そう言いながら僕は顔を上げた。

「ん? 何がわかったのじゃ?」

「地図は、やっぱり宝の地図だったんだよ! ——おじいちゃんの居場所を教えてくれていたから。アハッ!」

「——ありがとうよ。こんな、おいぼれジジイを宝じゃと言ってくれて。」

じゃがのお、おまえさんは、わしなんかと比較にならないほどの、はるかに、はるかに、すてきな、この上ない宝をすでに持っているんじゃよ」

「——」

「むろん、ほかならぬ、おまえさん自身のライフじゃ」

「——」

「わしにとっても、この上ない宝じゃ。そして、おまえさんのご両親にとっても、この上ない宝じゃ」

音楽イン ♪Birthtime

「——」 なぜか、このとき、生まれて間もない僕をほっとしながら抱いている母と、それを写真に撮っている父の姿が心に浮かんだ。

「おまえさんが、かつて誕生して、今こうして生きていることは、決してあたりまえじゃない。それは、さまざまな幸運や、親を含む、さまざまな方々の多くの努力や力添えのおかげのことなんじゃよ」

「——」

「何と言っても、小さな子どもだった、お父さんとお母さんが成長して、思春期を乗り越え—— そうして、何らかの形で、めぐり会わなければ、おまえさんは存在していなかったのじゃからのお」

「——」 ……

「それに、最初は、誰もがたった1つの細胞じゃった。そのたった1つから始まって、ここまで育ったのじゃから、それはもう大した幸運で、とつてもありがたくて“あたりまえ”から程遠いことじゃ」

「——」

「それに、生まれてから何年もの間、誰もがみな、自分だけでは、ほとんど何にもできなかった。

例えば、生まれて間もない赤ちゃんの頃だったら、おっぱいやミルクを飲んだりも、おむつを換えたりも、お風呂に入ったりも…どれもこれも誰かの助けを借りて初めて達成できたことじゃ」

「——」

「そう言えば—— おまえさんのお父さんやお母さんが、赤ちゃんの頃のおまえさんと幼いお兄さんを連れて、わしのところにやってきてくれたときのことが、昨日のこのように目に浮かぶのお」

「——」 ——え!? 手紙の中の“再会”って、そういう意味?

「——お父さんやお母さんは、子どものいない、わしら夫婦のことを思いやって遊びにきてくれたんじゃろうな。赤ちゃんだった、おまえさんやお兄さんを、わしと妻に抱っこさせてくれたよ。

——とつても、うれしかった。とつても」

全然、知らなかった。「——父や母や兄とお知り合いなのではうか?」 思わずかしこまって、そう尋ねた。

「お兄さんとは、赤ちゃんだったおまえさんと一緒にのときに会ったっきりじゃった。小さかったから、おそらく、わしのことを覚えておらんじやろう。

じゃが、お父さんとお母さんとは、よく知り合っておる。おまえさんが生まれるずっと前からのお」

「——」 ……

「まあ—— おまえさんらは、わしらの孫みたいなものじゃな。いや、ひ孫かな?」 おじいさんは、しばし、しみじみ心笑んだ。

「——」

音楽 ♪ Birthtime 67へ続く

67

「今、ここまで大きくなったおまえさんが、まず何よりすべきことは—— 自分自身のライフを、精一杯、大切にすることじゃ」

「——」

「——もちろん、いつまでも自分のライフだけを大切に続けなさいと言っておるわけではないぞ。なぜなら、自分だけを大切にして周囲を大切にしておらなければ、いずれ周囲が心身の健康を失ってしまい、その影響を受けて、結局は、自分自身を大切にできなくなってしまうからじゃ。

自分を愛することは、自分と周囲の両方を愛しておつてこそ、本物の物になる——」

「——」

「むろん、周りだけを大切に続けなさいと言っておるわけでもないぞ。なぜなら、逆に周囲だけを大切に自分自身を大切にしておらなければ、いずれ自身が心身の健康を損なってしまい、そのせいで、結局は周囲を大切にできなくなってしまうからじゃ。

じゃから、周囲を愛することも、自分と周囲の両方を愛しておつてこそ、本物になる——。

つまり、自分のライフも周りのライフも両方を大切にすることが大事になるんじゃ」

「——」

「確かに、ときには自分自身以上に大切な誰かを守るために、自分を犠牲にしなければならないこともあるかもしれん。

しかし、そもそも、その“自分自身以上に大切な誰か”に本当の意味でめぐり会うために、自分と相手の両方を大切にしながら続けることが不可欠じゃろう」

「——」

「おまえさんも、自身と周囲の両方を大切にしながら本当の意味で自分自身をこの上ない宝のように大切にしておれば、将来、おまえさん以上の“この上ない宝”と、きつとめぐり会えるはずじゃ。

——そう信じて生きておつてよいんじゃ」

「——」

「——。むろん、その“この上ない宝”は、わしのことではない。

——じゃから、おまえさんの人生は、本当に、これからなんじゃ」

それでも、涙流しながら手紙を書いたおじいさんのライフも、間違いなく、この上ない宝なのだと思うた。

音楽終了 ♪ Birthtime

68

「——うむ。やはり見込み通りじゃ。背もすっかり追い抜かれてしもうたし、声変わりも始まっておる。——思春期つてやつじゃな？」

「——」

「いいのお、若いもんは——。これから、手紙通り若者と呼ぼうぞ。アッハッハッ！」

「——。——おじいちゃん？」

「——ん？」

「おじいちゃんの人生、これからは長いんだかね。これからも、まだまだ楽しいことやうれしいことが待っているかね。そう言いながら、丸い石をおじいさんに、返そうとした。

「おっと、待った——。一度お上げたもんじゃ。

どうか、お納めくださらんか？ お守りじゃと思つて——。

「——でも、奥さんの形見でもあるんでしょ？」

「妻には、365日24時間、いつでも会える——」

「——」

「もしものときは、わたらの形見じゃと思つてほしい。

よく考えてみたら、孫、ひ孫のような、おまえさんの手元にあるとわかっていた方が、安心で、幸せじゃ。それは妻も同じじゃと思つ。——どうか、頼む。わたらのために、そうしてほしい」

「——わかった。大事にするよ」

「ありがとうよ」

69

それから、ランプベリーのことも含めて、この1年で考えたこと、感じたこと、やったことを、おじいさんに話して聞かせた。

「そうか—— ランプベリーのことは、つらかったのお」

「ああ——」・・・「——あ、でも、今は、もう大丈夫さ」

「——うむ」

「——」・・・

音楽イン ♪冬 Winter

思わず悲しげな表情をしてしまった僕に気づいたからか——

おじいさんは、静かに語り始めた。「まあ、動物にしる人間にしる、いずれ、いつかは、この地球から引退してしまう。

しかし、そのことにさえも重要な意味がありうるんじゃないよ」

「——」

「少し冷静に想像してみてほしい。地球上にライフデビューしたあらゆる生きものたちが一切引退しない場合にどうなるかを——」

「——」・・・

「まあ、科学技術が十分に育ち、ほかの天体へも含め、宇宙へ進出する可能性もあるだろうから、話は複雑じゃが——」

「——」・・・

「いずれにせよ、地球から引退することには、少なくとも、それによって未来の世代のためにスペースや資源を譲ってあげられるという大事な意味がありうるんじゃないよ。

そうやって、ライフあふれる地球をリレーし続けるんじゃないよ。

過去の世代から今の世代へと、今の世代から未来の世代へと、次

つぎ々と——」

「——」・・・

「それは、わたらのように実の子孫を残せなかった存在にとっても同じじゃろう」

「——」

「それでも、そりゃあ、さびしいさ。さびしい。このライフあふれる地球からいなくなっちゃうのは——」

「——」

「じゃがのお、そのことで——ただ悲嘆にくれたり、ただおびえたり、ただ投げやりになったり…するだけでは、つまらん結果を招いてしまうだけじゃろう」

「——」

「今生きている存在、自身を含むあらゆる生物たちはみんな、いずれ地球から引退してしまう。まずは、そのことを十分に受け入れる。

じゃが、決して、そこにとどまるのではないぞ。

“だから、どう生きたらいいのか。だから、どう生きたいのか。…”

——つまり、“だから、どう生きるのか”こそをしっかりと見つめるんじゃないよ

「——。だから、どう生きるのか——」

→ どう生きるのか——

音楽 ♪冬 Winter → ♪春 Spring

“だから、どう生きるのか”
こそをしっかりと見つめる

「そうじゃとも。

だから、どう感じ、どう考え、どう行動しながら生きるのか。

だから、人生で、何を選択しながら生きるのか。

だから、誰に何を伝えながら生きるのか。

だから、誰に何を与えながら生きるのか。

だから、誰に何を残しながら生きるのか。

だから、どのような人生のあり方を実現しながら生きるのか。

…も含めてじゃ」

「——」

「それは、結局、過去に新たに生まれた何か、今、新たに生まれている何か、将来、新たに生まれるだろう何かを見つめながら生きることにもつながるじゃろう」

「——」 ——そうだ！ 過去に、太陽も、地球も、動植物も、人間も、自分も…新たに生まれた。

だから、未来に、新たに何かが生まれてもおかしくないんだ！

将来、新たに何が生まれるのだから？

将来、新たに何を生み出せるのだから？ ……

やっぱり—— 『カコ イマ ミライ』も、ワクワク粋だった？

『カコ イマ ミライ』も、フレー！ フレー！ フレームだった？

…

「それらを見つめながら生きておれば——

将来の目標を健全に思い描けるようになるのかもしれないし、あるいは、今生きていることの喜びを全身で感じ、瞬間瞬間を愛おしく思いながら過ごせるようになるのかもしれないし、あるいは、人生の実り、フルーツのような何かを、より良質で十分満足なレベルにまで高められるのかもしれない」

——おじいさんは、立てた親指を前後させながら、頭を少し傾けながら、僕に心笑みかけた。

「——ああ。そうだね。 ——ありがとう」

それから、おじいさんと僕は、腰を下ろした状態で、しばらく水平線を眺め続けた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

70

「——よし、それでは、そろそろ教えよう」とおじいさん。
 「え？ 何を？」と僕。
 「次のフレームをじゃ——」
 「ああ、そうだったね」 そのまま僕は固まってしまった。
 「——ん？ では、地図をよこしておくれ」
 「——って、やっぱり必要だよね」
 「どうしたんじゃ？」
 「——。誤って海の中に——」
 「あ！？」 おじいさんは、急いで立ち上がり、海面をのぞき込んだ。
 地図が、どこにも見あたらないことを悟ったおじいさんは、しばらくの間、呆然と立ちつくしていた。
 「——。——。おまえさん—— そいつを取り戻そうとして、海に飛び込んだってわけか——」
 「——」僕は、小さくうなずいた。
 「そうだったのか——」
 ——うむ、うむ。そうか、そうか。
 わしゃあ、少し力が湧いてきたぞ」
 「——」
 「——さっき怒鳴って、損したぞ。アッハッハッ！」
 おじいさんは、やはり誤解していたようで——

71

音楽イン ♪夏 Summer

「そうとわかれば——」明るく、そう言うと、おじいさんは、ゆつくりしゃがみ、そのまま横になった。
 「——ん？」と僕。
 「ひとまず昼寝じゃ」
 「え？ ——地図は大丈夫？」
 「——。若者よ——」
 「ん？」
 「フレーム・マスターをなめちゃあいかん」
 「いや、別に、なめちゃいけないけど——」 あわてて否定しながらも、ランプベリーがおじいさんの顔をペロペロなめているシーンが、心に浮かんだ。
 「まあ、なんとかなるじゃろう。
 それより、おまえさんも、たまには昼寝してみたらどうじゃ？
 ——昼寝にも、それなりに意味がある。少しは見習え」
 「——。——こっちは昼寝しなくていいよ。遠慮しとくよ」
 「そうか——。じゃ、お先に」目を閉じるおじいさん。
 「——」・・・
 でも——
 僕も、とりあえず横になってみることにした。
 でっかな青空が広がっている——
 白い雲が、ゆるやかに流れている——
 さわやかな潮風が、全身をなでている——

ここで横^{よこ}になると、こんな感じ^{かん}になるんだ——。
けっこう気持^{きもち}ちいいかも——。

おじいさんは、幸せ^{しあわせ}そうな笑^えみを浮^うかべながら横^{よこ}になっていた。

あれを、なくしちゃって—— 本当^{ほんとう}に大丈夫^{だいじょうぶ}だろうか？

それなのに昼寝^{ひるね}だとは—— ……

ったく—— ……

ああ、なんだか——

まぶたが—— だんだん重^{おも}たくなってきたぜ——

ああ—— あれえ—— ……

からだは、そうとう休^{やす}みがっていたらしい。

僕は—— 不覚^{ふかく}にも、そのままぐっすり^{ねむ}と眠^こり込んだ。

音楽♪ 夏 Summer

サビのあたりから

そのままエンドロールに続く

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

となりのコンパス③

第3 フレーム

『→』

【完】